

美作国建国と

古代の鏡野町域②

平安時代に編纂された『延喜式』という書物によれば、朝廷は地方行政を行うに伴い、国々を政治力・経済力・土地面積などの国力により、各国を大国・上国・中国・下国にランク付けをしているのですが、美作国は備前・備中・備後のかつて吉備国といわれた地域などと共に、二番目にあたる上国にランク付けされています。現在の岡山県では、県南にあたる備前と比較して、美作は山間部で拓けていないイメージがありますが、古代においては遜色ない国力を持っていたことがうかがわれます。

美作国がこのような高い評価を受けている理由の一つとしては、鉄生産が挙げられるでしょう。中国山地を構成する花崗岩には、良質の砂鉄が多く含まれており、その砂鉄を原料とした鉄生産が古代から行われてきたことが発掘調査でも明らかになっています。

区内に存在した久田原遺跡では、多数の掘立柱建物や製鉄炉・鍛冶炉が見つかっており、硯の破片も出土しています。硯は、古代においては役所や寺院で使用されることが多くあることから、官衙（役所）的な施設の可能性も指摘されており、吉井川上流の狭小な地域に存在する官衙は、山間部で生産された鉄を管理した場所ではないかという見方もあります。『延喜式』でも、美作国が朝廷へ物納する税



古代の製鉄炉跡（高下休場遺跡・西屋）

久田原遺跡出土の硯の破片（左）
美作国府跡出土の硯（右） 津山郷土博物館提供長岡京出土木簡
向日市教育委員会提供

（調）として、鉄や鉄があることが書かれており、鉄が美作国にとって重要な資源であったことは疑う余地はありません。

布原一帯の大開遺跡・六番丁場遺跡・九番丁場遺跡でも奈良時代頃の掘立柱建物や、製鉄炉・鍛冶炉が見つかっています。ここでは硯や瓦など官衙遺跡特有の遺物は出土していませんが、立地条件が県北部で調査された官衙遺跡と共通する部分も多く、これも官衙的な施設の可能性が考えられています。布原台地から見下ろす津山盆地西部の平野は、吉井川・香々美川の氾濫原で、古代から稲作に適した場所であったことが推定できます。

延暦三年（七八四）から十三年（七

九四）に都が置かれた、長岡京（京都府向日市・長岡京市・京都市西京区）から出土した木簡（文字が書かれた木の札）の中の一つには、「美作国吉田郡香美郷白米」と書かれたものがあります。鏡野町域から白米を税として納めたことを示す貴重な資料ですが、想像を広げれば布原の官衙的な建物群は、税として納めるこうした米などの作物を、保管・管理するための建物があったのかもしれない。

このように町内でも、建国当時から山間部にまで公的施設と思われるものや、都の文化をうかがわせる遺構や遺物などが見つかっており、美作国発展に大きな役割を果たしていることがわかります。

参考資料：『鏡野町史』、『津山市史』第巻、『久田原遺跡・久田原古墳群』、『美作国府』
協 力：津山郷土博物館・向日市教育委員会

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733